

もちよび地蔵^{じそう}

むかし、^{とみた}富田に^{いちろう べ え}一郎兵衛というもち屋がいた。一郎兵衛は岩舟の地蔵さまを深く信じていたので、毎年正月には大きなもちをお供え^{そな}して「^{かないあんぜん}家内安全」「^{しょうばいはんじょう}商売繁盛」を願っていた。

ところが、その子供の^{じろう べ え}次郎兵衛になってからは、大きなもちはもったいないと、少し小さいもちをお供えした。そうするうちにだんだん、もうからなくなっていき、そのうち、小さなおもちをお供えできるかどうかの^{びんぼう}貧乏になってしまった。孫の^{さぶろう べ え}三郎兵衛になると、さらに^{ます}貧しくなり、正月にお供えすることができなくなってしまった。

ある年の^く暮れ、三郎兵衛がねていると、^{まいばん}毎晩西の方から、

「三郎兵衛！もち持ってこーい！」

という声が聞こえてくるようになった。ある夜、三郎兵衛はその声をたどって西の方に歩いていくと、岩舟山の地蔵がある方向から聞こえていることに気付いた。

三郎兵衛は、明けた年の正月に、大きなもちをつくってお地蔵様にお供えをして「家内安全」「商売繁盛」をお願いした。それからと

いうもの、知らず知らずのうちにくらしも楽になっていき、毎年^{くろう}苦勞
せずに大きなもちを供えられるようになったということだ。今でも、
その子孫^{しそん}は毎年おもちを供えているとか…。